

補論：森信三の全一学と実践

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : An Appendix : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori

鳥取短期大学研究紀要 第67号 抜刷

2013年 6月

補論：森信三の全一学と実践

山 田 修 平

Shuhei YAMADA : An Appendix : The Total Philosophy and Practices of Nobuzoh Mori

森は、壮大な自証・哲学の体系を示すと共に、他方、化他・啓発の書を著している。それは全一
的思想体系を背骨に、森自身の実践に基づく、いわば生き方の指針を示したものである。その代表
的な著書が『修身教授録』と『幻の講話』である。また『幻の講話』の前提となるのが、敢えて小
説の形態で理想的な人間像を描いた『隠者の幻』である。本稿では、この3冊の概要を示すと共に、
森の実践論、いわば生きる指針について考察する。

キーワード：森信三 修身教授録 隠者の幻 幻の講話 生きる指針

ば生きる指針の現代における意義を考察する。

はじめに

森の学問、その表現形態には森自身の表現を用い
れば「自証」と「化他」がある。「自証」は詰めれ
ば哲学そのものであり、「化他」は人間の生き方、
実践に関しての啓発といえよう。

先に紹介したように森の「自証」の学・哲学の体
系は『恩の形而上学』¹⁾で土台が形成され、様々な
苦難、経験を経て戦後『即物的世界観』²⁾を中核と
する『哲学五部作』、さらに80歳になって『創造の
形而上学』³⁾等全一学へと集大成された。

他方、「化他」の書は数多くあるが、その中核と
なるのは、1940(昭和15)年、44歳で著した『修
身教授録』⁴⁾であり、その延長上にあるとも言える
1970(昭和45)年、76歳の著『幻の講話』⁵⁾である。
またその前提に1968(昭和43)年、72歳に理想的
人間像を小説という形で描いた『隠者の幻』⁶⁾がある。

ところで森の場合、この「自証」と「化他」は決
して別個のものではなく、実践、生き方の土台には
確固たる思想体系・哲学がある。

本稿では、この代表的な「化他」の2著書と『隠
者の幻』をとりあげ、その背景、構成、内容の要点
を紹介し、「自証」の体系に基づいた実践論、いわ

1. 『修身教授録』

1937(昭和12)年大阪天王寺師範(現・大阪教
育大学)の専攻科の倫理・哲学の講師であった森が、
本科一部生の「修身科」の授業も担当することになっ
た。当時の検定教科書に飽き足りないものを感じて
いた森は、教科書を用いず、口述で行い、生徒に筆
録させた。森は本書の自序で、「これは、大問題で」
「専門の『哲学倫理』よりも骨が折れそうだと思う
たのである。第一に話せばなしではいけない。
なんとすれば一言一句が『実践』につながらねばな
らない。そこで私は筆写力の一番遅い生徒を最前列
の窓辺にかけさせ、相手の書く速度を見ながら話す
ことにしたのである。」⁷⁾、また「修身科」の授業に
検定教科書を使用しないことは、当時として異例中
の異例であり、「退職を覚悟」⁸⁾の授業であったと記
している。

1939(昭和14)年、この講義録の一部を目にし
た当時教育界で高名であった芦田恵之助は感嘆し、
芦田の息子の経営する出版社から『修身教授録』全
五巻を出版する。これが多く教育関係者から絶賛さ
れ、10万冊出版のベストセラーとなった⁹⁾。

(1) 本書のテーマと構成

以上のように、『修身教授録』は1937（昭和12）年、1938（昭和13）年に師範学校の生徒を対象に森の行なった講義録であり、当然、時代・社会状況、また講義の対象者に限定があると思われるが、扱うテーマの広さ、その内容の豊かさ、深さ、基底にある生徒への思い、将来に対する期待は時代を超え、世代を越え訴えかけ、まさに人間学の要諦を示す。

改訂版¹⁰をもとに、構成と要点を紹介しよう。

第1部と第2部に分かれているが、第1部は1937年、第2部は1938年のそれぞれ40回と39回の講義を記録している。

第1講目の「学年始めの挨拶」から始まり、最終講義の「わかれの言葉」まで、テーマは人生、国家、教育、学問、友人等の領域から吉田松陰、ペスタロッチー、良寛、さらに具体的に、読書、鍛錬道、性欲の問題、仕事の処理、対話、上位者に対する心がけ、誠、気品、真面目、敬等徳目に至るまで広範にわたる。

森がその折々に大切だと思う関心事をテーマに講義したのだろうが、その根底に「人生二度なし」の根本信条があり、『恩の形而上学』で示した哲学体系が全体を裏づけている。いわば「自証」の学が「化他」の形として示されている。それだけに個別的でありながら統一的なのである。

各講義のはじめに、森の様子、生徒の期待感等、講義の後には、講義の余韻等の生徒の添え書きがあり、講義の臨場感を一層感じさせてくれる。

(2) 幾つかのテーマの要点

ここでは広範なテーマのうちから、幾つかの要点を示しておこう。

読書¹¹

まず前回までに講義した教育者になるものの学問・修養の眼目について復習した後、第9講目に読書について語る。学問・修養といっても、読書抜きにしては考えられない。読書の人生における意義は、「心の食物」¹²だとする。食事をとらないと身体的

健康をそこねると同様に、読書を怠ると心が廢れる。確かに人生のさまざまな経験は、心を養い太らせてくれるが、「人生の深刻切実な経験も、もしこれを読書によって教えの光に照らしてみない限り、意味がないばかりか、時には自他とも傷つくこととなる」と経験・実践と読書の関連について述べる。さらに「ある意味では、人間生活は読書がその半ばを占むべき」、そして「他の半分は、かくして知り得たところを実践して、それを実現していくこと」だ。多くの人々がこの点に気付かないのは、「結局は、その人の生命力が真に強靱でないから」だとする。また学者と実践家の読み方の違いについても言及する。「学者は学者の職責上、細部にわたる研究をしなければ」ならないが、「実践家の読書は、大観の見識を養うための活読、心読であって、その点、実践家の読書の方が自在だ」とする。再度、学生たちに読書の必要性を強調し、講義が一段落した後、何冊かの書物の紹介をする。

尚友¹³

古来より「読書、尚友」と使われている言葉だとして、「尚友」について語る。これは「友を尚（たと）ぶ」という意味で、「友と親しむ」ではなく、「友を尚ぶ」と言ったところに、深い味わいがある。

人を知る基準として、第1にいかなる人を師匠としているか。第2にいかなることを、自分の一生の目標としているか。第3に、その人が今日までいかなる事をしてきたか。第4に、その人の愛読書はいかなるものか。そして最後にその人の友人はいかんとしたことだと示す。

そしてこの5つは全て関係するという。人間は師を離れては、生涯の真の目標を持たない。愛読書も師の教えの光に照らされて見えてくる。そして「真に尊敬するに足る友人とは、結局道の上の友」¹⁴ということだ。そして師弟の関係を仮に縦の関係とすれば、友人関係は、まさに横の関係、師弟関係から絶対的なものを教わるとすれば、友人関係からは、人生の相対的方面を教わる。ところで哲学において、真の絶対は、相対の面を含んで初めて真の絶対であ

るといわれるが、この真理は、師弟朋友というような、人生における最も具体的関係にも当てはまる。真の友人関係は、ある意味で師弟関係の仕上げというべき面があると真の友人関係の奥深さを述べ、最後に、真に道を求めて已まなかったら、やがて師とすべき人に巡り合い、そこに同門の友とすべき人を得られる。それ故尚友は、結局は道を求め、師を求める問題に帰すると締めくくる。

仕事の処理¹⁵⁾

人間の生活は、ある意味でまったく仕事の連続だといってよい。その意味から、人間の偉さは、この仕事の処理のいかんによって決まる。真の修養はこの仕事の処理にその中心があるといえたとその意義を始めに述べる。その上で、ヒルティの『幸福論』の仕事の処理論を紹介する。そして「まず着手する」、「一度着手した仕事は一气呵成にやっつてのける」、「仕上げはまず80点級というつもりで、とにかく一気に上げることが大切」と仕事の処理の秘訣を示した上で、その根本は「どこまでも仕事を次つぎと処理して行って、絶対に留めぬところに、自己鍛錬としての修養の目標があるということ、深く自覚することだ」とする。

性欲の問題¹⁶⁾

性欲は人間の根本衝動の一つ、生理的といっても、「性欲は人間生命を生み出す根本動力」、決しておろそかに考えてはならぬと切り出す。その上で「性欲の微弱なような人間には、真に偉大な仕事をすることはできない」、「またみだりに性欲を漏らすような者にも大きな仕事をできない」とし、人間の偉大さは「その旺盛な性欲を、常に自己の意志的統一のもとに制御しつつ生きるところから」生まれる。そこに「人間としての真の内面的弾力が生ずる」。その上で、人間には精神発達段階があることに触れ、性意識の起こり始める思春期は、そのまま性欲を漏らすべき時期ではない。大切なのは「一定の時期に達するまできびしく貯えて、その力を内に転じて深く貯えていく時、そこに人間は、心身共に十分なる基礎ができる」と、生徒に、いまが「一生の生命の

弾力が、養われるか否か岐れ目だ」とメッセージをおくる。

気品¹⁷⁾

「気品」は人間の値打ちのすべてを言い表す、全人格の結晶、人から発する内部的香りである。そして気品は、単に第一代の修養だけでは得られない、そこには先天的なものが働いていると祖先代々の修養の集積という外ない。とはいえ、各人が依然として修養によって心を清める以外気品を身につける道はない。その場合、もっとも大切なのは、人間がただ一人の場合でも、深く己を慎む「慎独」だとする。この慎独の根本は、結局天を相手にすることだという。

情熱¹⁸⁾

情熱は人生の動力であるとした上で、人間の偉さは、大体2つの要素から成り立つ。1つは豊富にして偉大な情熱であり、今ひとつは、かかる豊富にして偉大な情熱を、徹頭徹尾浄化するという根本的意志力だとする。そして、自己の情熱を深めていくには、偉人の伝記を読む、優れた芸術作品に接することが大きな力になる。また情熱を浄化するのは、宗教や哲学が大いに役立つと具体的対応についても論及する。

(3) 『修身教授録』の特徴

上記は『修身教授録』に示されている多くのテーマのうちの一部の要点にすぎない。先ずここで気づくのは、戦前の「修身」という教科の中に、一般には取り上げられない、あるいは避けられる「性欲」や「情熱」等に象徴される題材について語っていることである。

「性欲の問題」の講義の折、森は冒頭に生徒に対して「事柄の性質上、正面からあまり聞いたことがなかろう」、「しかし諸君らにとって、最も大切な問題であり、この問題を抜きにして、われわれの生活の真の現実把握できない」¹⁹⁾と切り出している。

また「情熱」の講義の折にも、一般に「修身」の教科書にはないテーマだとしながら「修身科という

のは、なによりまず人間をして、力強くこの人生を生きるような、覚悟をさせるものでなくてはならぬと思う²⁰⁾とこのテーマをとりあげた意図を述べている。

ここで明らかなように、森は従来の教科の形にこだわらず、若い生徒が生きるうえで真に必要なテーマを意図的にとりあげ、論じている。戦時体制直前の当時の時代背景を考えれば大変な勇気を必要としたであろう。

また講義の内容は、ここではその要点しか示さなかったが、森の学問的体系の土台である『恩の形而上学』を背景にしつつ、理論体系を裏づけにした具体論、実践論である。はじめに「読書」、「尚友」、「仕事の処理」等各テーマの人生における意義、意味を明確にした上で、森の実践に基づく具体的な取り組み方を示唆する。一言一言に言霊を感じるのである。

2. 『隠者の幻』

森は『修身教授録』の姉妹版というより、完成版ともいえるべき『幻の講話』を76歳に著すが、その前提となるのが72歳の著『隠者の幻』である。

『隠者の幻』は小説の形態をとり、理想的人間、隠者として「有馬香玄幽先生」が登場し、その先生を慕う弟子の一人「私」が語る形で物語を展開する。その「私」は森の分身と思われるが、その何年後、「私」はある学校に招かれ有馬香玄幽先生への思いを胸に、「名児耶承道」と名乗り、授業を行い、それをまとめたものが『幻の講話』である。

(1) 隠者への憧憬の背景とモデル

隠者は、一般的に「俗人との交際を絶って山野などにひっそり隠れ住む人」と説明される²¹⁾。

森は20歳代半ばから、心の奥底に隠者に対する一脈の憧憬が始まり、生涯終始一貫して絶えたことがないという。そして隠者への無限の憧憬の念があったからこそ、「蹉蛇たる生涯の幾転変にも拘ら

ず、現在の地点まで辿り着く」ことができた『隠者の幻』の序文で述べている²²⁾。

森の隠者への憧憬の念は、学生時代たまたま目にしたダンテ著・山川丙三郎訳『神曲』の新井奥邃の序文を目にしたときに端を発する。わずか3ページの文章に生命のリズム、奥深さを感じ、隠者・新井奥邃に魅せられた。また「終生の師」と慕う西晋一郎の高風に対する景仰の念も働いている。さらに遡れば、森の父方の祖父は生涯為政の道に終始しながら、その内心にはどこか一脈東洋的な隠遁の趣に通じるものを持っていたのも、森の「血」の中に引き継がれたかもしれないという。

ただ『隠者の幻』は誰かをモデルとしたものではなく、「生涯を通して希求し続けた隠者への憧憬の念に、ひとつの形姿を賦与する試み」である。そしてそれは結局「宗教的希求」、すなわち「宗教的に生きることに對して、熾烈な希求の念を抱いてきたかの一端を示す」ものであると記す²³⁾。

(2) 『隠者の幻』のあらすじ²⁴⁾

「私」は大学院の学生時代に、フトしたことから、有馬香玄幽先生に出会う。そして今まで教わったどの先生より深く尊敬するようになる。次第に分かるのだが、先生は、終戦前は東京大学の前身の東京帝大の助教授だったが、敗戦と同時に、退職し、全国各地を廻る。それは東京という人口最大の都市にただけでは真の日本の姿は分からず、従ってそこでは真の学問はできないという思いからである。それぞれの土地に住み人々の中に溶け込み、周囲の人々のために尽くしている人々と知り合う必要がある。つまり真実の生きた学問は、ただ書物を読んでできるようなものではないと全国行脚をされた。農漁村での生活、中・小企業の工場での労働、東京・大阪等の大都市でのドン底生活をしている人々と交流された。しかし、先生は、そうした全国行脚の旅をピタリと止め、徹底した隠遁生活に入られた。京都の北白川から比叡山に深く入った山中で生活され、誰一人として、先生の隠れ家へ行ったものはなかった。

先生がそうした生活をされたのは「結局われわれ人間は、一体どこまで世間的な名利の欲から遠ざかることができるのかの、いわば実験をなさるためだった。」その結果、徹底した隠者のような生活をされて7年、先生が悟られたのは「われわれ人間は、この肉のからだを持っているかぎり、食欲や睡眠の欲はもとより、名利の念も、徹底的には根切りすることはできない」ということだった。そこで先生は、この悟りを踏まえ、もう一度世の中へ出て「奉仕の生活」に身を捧げようとした。そんな時に「私」は先生に出会った。京都の銀閣寺の近くの同志宅で、数人の弟子が先生を囲んで行なわれる月1回の例会、また京都府の丹波広畑の清源寺の木喰上人の仏像拝観への同行などを通じて、そのたたくまいや一言一言に多くのことを学び、先生に対する畏敬の念がますます深くなっていった。しかし、悲しいかな、その頃先生のお体は、すでに不治の病に犯されていた。先生はわれわれ弟子に迷惑をかけないようにと、山中深く行方を暗ましておしまいになられたと、「私」が語る隠者・有馬香玄幽先生の物語は終わる。

3. 『幻の講話』

森は76歳の折、森自身の言葉を用いれば、「宿命の書」²⁵⁾、『幻の講話』を著す。

(1) 『修身教授録』との関係

森はこの『幻の講話』と『修身教授録』との関係について、深い「類縁性」を持っているという。両著とも「われら如何に生きるべきか」という人生の根本問題を中心としながら、共に脚下の現実的实践という視点に立つ「啓発の書」という点では、深く関係する。また両著の差異について、『修身教授録』の成立は、戦前のことであり、「わたし自身も、ようやく不惑の齢に達した前後のこととて、そこにはある種のうっ屈した情熱はあっても、いまだ円熟の境には遠く、これに反して『幻の講話』は、戦後四半世紀を経過した現在の現実をふまえて成ったも

の」、「わたくし自身も喜寿という類縁に達していることを思えば、両者には必ずから優劣互いにその趣きを異にするものがあるはずである。」と両著の関連の深さと共に、書かれた時代背景、また森自身の年齢、円熟度による差異について述べている²⁶⁾。

(2) 『幻の講話』の設定と対象

『隠者の幻』の「私」・名児耶承道は道縁のある親しい間柄の中学・高校併設校の校長の懇請を容れ、倫理・社会及び道徳教育の時間をさいて、週1回生徒達に講話をする。本書は名児耶を敬慕する青年教師数名と、生徒有志との協力により、その筆録を編集したという設定である。

名児耶は始めの挨拶で有馬香先生の話をした後、「私は、30歳の時、先生と永遠にお別れをし、それから10年、先生の足跡をたどって全国各地を巡り、ようやく先生の精神の一端が多少ともわかりかけてきた。それ故、2-3年前から、求められるまま、全国各地の縁のある方々に話している。これから毎週1回話すことになるが、話の内容はどの1つをとってみても、結局は先生から教えられ、学んだこと」²⁷⁾と話し始める。

『幻の講話』は五巻構成となっているが、森は第一巻の「はしがき」で、第一巻は、一応中学1-2年生、第二巻は2-3年生、第三巻は中学校から高校へかけての女子生徒を対象に、第四巻・第五巻は中学校から高校、また大学前期までの学生を対象と巾を持たせて書いたつもりだが、どの年齢層に最も適しているかを真に判定するのは、著者ではなく読者であろうと記している²⁸⁾。

(3) 『宿命の書』

森は『幻の講話』の最終巻・第五巻の「あとがき」でこの著は一種の「宿命の書」ともいえると次のように理由を述べている。「『森信三全集』を完成して間もないころ、従来より構想を抱いていた本著の執筆をはじめたのだが、妻の死、続いて思いがけない長男の急逝という人生の最苦難に遭遇し、昭和47

年11月3日文化の日を期し、兵庫県尼崎市の一角の同地区の片隅で、独居自炊の生活に入った。それは昔なら世の無常を觀じたものは山林に隱遁したが、現代のような時代には、むしろそれと正逆の方に身を投じたほうがまだましだと考えたからである。あしかけ5年の歳月を経て、完成した書である。

続けて、この書は「夢想だにしなかった全国の有縁の同志、並びにそのかみ天王寺師範で教えた人々の懇情の結晶たる莫大な額による『刊行基金』に支えられ」刊行されることになった。「まったく『神天』の加護という他ない。宿命は、ひとたびそれが自覚せられるや恩寵に転ずる」、「この一連の叢書の上にも、その光被を開始した感が深く、今はただ首を垂れて謹んで神天の『声』に耳を傾けたい」²⁹⁾と述べる。

(4) 『幻の講話』のテーマと構成

先記のように名児耶承道先生が、中高一貫校で、中学生、高校生に講話する『幻の講話』は第一巻から第五巻までの5部構成になっており、徐々に対象が上級生になっていく。各巻とも30講話となっている。各回毎に1テーマを示し、講話する形をとっている。

テーマの幾つかを追ってみると、第一巻では、第1講で「始めのあいさつ」として自己紹介を師・有馬香玄幽先生との関係で述べる。第2講以降、「人生で一ばん大事な年ごろ」、「人生二度なし」、「まず人間としての軌道」、「甘え心を振り捨てよう」等を前半で話し、中半に「腰骨を立て通そう」、「男らしさ」、「女らしさ」、「からだを鍛えよう」、「大いに本を読もう」、「自由に文章の書ける人に」、後半に「感謝のこころ—宗教について」、「人を幸せにする心—政治について」、「行なわなければ知ったとはいえない」、そして最終講話は「人間としての至高のねがい」で締めくくる³⁰⁾。

テーマのみからも察せられるように、森哲学の根底にある「人生二度なし」を前提に、生徒に人生の中の「今」を考えさせながら、具体的な生き方を伝

え、次第に視野を広げていく。

第二巻では、第1講「道縁」、第2講「人生の師について」、それ以降、「自分を育てるものは自分」、「家庭というもの」、「学校というところ」、「世の中へ出て」と生きる場について話を進める。また中半では「逆境の試練」、「正直の徳」、「誠実ということ」、「相手の立場に立って」と生きる上での重要な徳や心構えについて説く。そして後半に「職業天職論」、「人生の幸福」、「人生の終結」と人生の全体像を述べ、最終講話は「一日は一生の縮図」で締めくくる³¹⁾。

そして女生徒を対象とした第三巻は、「人の生き方」を根底にしながら、「女性としての生き方」を配慮したテーマ、また内容になっている。

「人生二度なし」、「人生の意義」から始め「両性の分化とその神秘」、「同権と分担」、「男女共学の問題」、「女性と母性」、「結婚」について講話する。

ここでは、男性と女性は天の配剤として本質的な相違があること、その違いに応じた教育や分担があつてしかるべきだとし、具体的に「育児と家計」、「料理 その他」、「しつけの3原則」と女性の役割について述べる。他方、男と女は同権であることにも触れ、才能のある女性がまだ生きにくい時代、社会であることに論及する。そして、女性が社会的に働く場合の覚悟についても触れ、1つの例として、森が最も魅力を感じる詩人であり、学者でもあり、神秘の女性「高群逸枝」を紹介する³²⁾。

第四巻は巾のある対象者を想定しているが、30回を、明確に3部構成にしている。

まず第1部では、「人生二度なし」、「人は何のために生きるか」を前提に「生命の無限観」、「物・生命・精神—即物的世界観—」、「神について」、「社会的正義—マルクス主義宗教—」、「民族の当面する諸問題」、「歴史は果たして進歩するか」といわば全一学の理論の根幹が話される。続く第2部では、具体的な人生論的テーマ「人生への通観」、「運命の自覚」、「職分の意義」、「結婚について」、「人間関係」、「経済の問題」等が取り上げられる。第3部では、前半

の5回の講話で「中江藤樹先生」、「石田梅岩先生」、「剣聖宮本武蔵」、「二宮尊徳翁」、「吉田松陰先生」が紹介される。いずれも思想、学問と実践が一体となった人々である。そして後半は「明治維新をめぐる」、「明治の時代と人」、「大正・昭和から敗戦へ」、「戦後のあゆみと民族の前途」と史観を述べ、最終講話で「人類の将来について」で締めくくる³³⁾。

最終の五巻も、四巻と同様対象者は巾をもった設定とし、3部構成になっている。

第1部では「万人が自己の哲学を」、「新たな人間学を」、「わたくしの人生観」、「わが世界観」に象徴されるように、各自にとっての哲学、人生観の必要性が語られる。第2部では、「知識と智慧」、「人物の大小と浅深」、「耐忍と貫徹」、「事務を処理する秘訣」、「開かれたコンミュン」、「わが生の記録一日記から自伝まで」と具体的なものの見方や実践論が取り上げられる。第3部では「世界における日本」、「西洋文明とその限界」、「東洋への回帰」、「民族の使命と島国の運命」、「国家『我』の超克」をテーマに世界の中の日本の役割と方向は、西洋と東洋の融合の縮図を提供し、世界の平和へ貢献することだと示唆する。最終講話では「敵たり宇宙の大法!!」として、中国の「易経」に基づき「物盛んなれば必ず衰う」、「人は物質的に繁栄すると、心はゆるむ」といわば「動的平衡論」を述べ、常に「活眼」をもってわが国や変転極まりない国際情勢をみて欲しいとエールを送る³⁴⁾。

(5) 各講話の導入

加えて触れておきたいのは、1回毎の講話の導入である。

まず、講話の始めに、その日のテーマを示す。そして、毎回、名言、俳句、詩、論語、経典等の全文、あるいは一節を示し、その解説をする。

幾つか示してみると、第一巻では、頼山陽の「立志」の詩³⁵⁾からはじまり、それ以降小林一茶³⁶⁾、松尾芭蕉の句³⁷⁾、第二巻では、坂村真民の詩³⁸⁾、山頭火の句³⁹⁾、第三巻では、八木重吉の詩⁴⁰⁾、第四巻では、

良寛の歌、戒語⁴¹⁾、そして道元の「正法眼蔵随聞記」からの言葉⁴²⁾、親鸞の「歎異抄」の一節⁴³⁾、そして第五巻では、「二宮翁夜話」から二宮尊徳の言葉⁴⁴⁾、さらにガンジーの言葉⁴⁵⁾が紹介、解説される。その上で、こうした句、詩、歌、言葉、経典等は頭で理解することよりも、身体で感じる事が大切だと、毎回生徒に暗誦することを求め、次の授業のはじめに、何人かを指名し、発表させる。授業の導入である。

次に前回の授業の復習を行なった後、提示したテーマについて語り、最後にまとめをし、授業を終える。

(6) 授業の展開に学ぶ

先記のように『幻の講話』は、森が宿願の「全集」を書き終えた後の「宿命の書」であり、全一学の啓発の最も円熟した著作である。

語り部・名児耶承道先生は森自身と置き換えられるが、名児耶の師・有馬香玄幽先生も森の投影であり、理想像であろう。

内容については是非一読を薦めるが、一部紹介したテーマからもある程度察せられるように、名児耶承道先生の講話を通して、「人生二度なし」、「人はいかにいくべきか」という森の根本信条を土台とした全一学の体系と具体的な人生論、実践論とわが国の課題、方向について語られている。そして対象者の年齢を充分考慮して分かりやすく述べられているが、内容の程度はいささかも下げられていない。従って、想定された対象者に限らず、どの年代層にも読み応えがある。

また毎回の授業展開にもひきつけられる。テーマの提示、前回示し暗誦を宿題にした句、詩等の生徒何人かによる発表、新たな句、詩等の説明に続いて、前回授業の復習。そしてテーマについての講話とまとめ、メッセージは全一的、理論的裏づけを持ちながら、あくまでも聞き手に応じて具体的で分かりやすい。生徒達は間違いなく名児耶先生のメッセージを吸収したに違いない。

おわりに

「森信三の全一学と実践(1)-(5)」では『自伝』に基づく森信三の歩んだ道、また自証の学の根底にある『恩の形而上学』はじめ『即物論的世界観』、また全一学の到達点としての『創造の形而上学』、さらに語録から幾つかの実践論を紹介し、考察してきた。

本稿では、補論として『修身教授録』、『隠者の幻』そして『幻の講話』を紹介した。対象を中学・高校生を想定した易しい言葉の中に含まれた広大な理論体系と深い人生観、そして具体的な実践論に改めて襟を正す思いである。

すべての元凶は、個人としても、国家としても「我」に走りすぎるところにある。生かされ生きる命を体感することである。人は心身即応の存在である。身体を立て直すことは、心を立て直すことにもなる。腰骨を立てること、それは主体的に生きる決め手である。他者、さらに言えば大自然との関係の中での主体である。誤った人間中心主義の現代文明のあり方を問い直さなければなるまい。世の中は、陰と陽、双方がいいということはない。動的バランスは厳然とした自然の摂理として働いている。歴史の大きな方向を見定めると共に、足元の実践から始めねばならない。

混沌とする時代、社会状況の中で、改めて全一学の壮大な体系と実践の指針から自己の生き方を問い直したい。

注

- 1) 森信三「恩の形而上学」『森信三全集 第一巻』実践社、昭和42年2月。
山田修平「森信三の全一学と実践(3)」『鳥取短期大学研究紀要』第64号、2011年12月参照。
- 2) 森信三「即物論的世界観」『森信三全集 第三巻』実践社、昭和40年10月。
山田修平「森信三の全一学と実践(4)」『鳥取短期大学研究紀要』第65号、2012年6月参照。
- 3) 森信三「創造の形而上学」『森信三全集(続篇) 第一巻』森信三全集刊行会、昭和58年3月。
山田修平「森信三の全一学と実践(5)」『鳥取短期大学研究紀要』第66号、2012年12月参照。
- 4) 『修身教授録』同志同行社全五巻、昭和14年に刊行され、その後『森信三全集』第八巻、第九巻、第十巻、実践社、昭和40年12月、41年7月、41年9月に収集されているが、ここでは改訂版、森信三『修身教授録〈現代に甦る人間学の要諦〉』竹井出版、平成元年3月を用いる。
- 5) 『幻の講話』の初版は5部作として『森信三全集(続篇)』第一巻～第五巻、昭和57年8月～58年8月に収集されているが、ここでは改訂版、森信三『幻の講話』第一巻～第五巻、実践人の家、平成2年を用いる。
- 6) 森信三「隠者の幻」『森信三全集 第二十四巻』実践社、昭和43年6月。
- 7) 前掲改訂版『修身教授録〈現代に甦る人間学の要諦〉』p. 2。
- 8) 同上 p. 2。
- 9) 山田修平「森信三の全一学と実践(1)」『鳥取短期大学研究紀要』第62号、2010年12月、p. 5参照。
- 10) 前掲改訂版『修身教授録〈現代に甦る人間学の要諦〉』
- 11) 同上、pp. 61-68参照。
- 12) 同上、p. 61。
- 13) 同上、pp. 69-74参照。
- 14) 同上、p. 73。
- 15) 同上、pp. 174-179参照。
- 16) 同上、pp. 161-167参照。
- 17) 同上、pp. 330-340参照。
- 18) 同上、pp. 335-340参照。
- 19) 同上、p. 162参照。
- 20) 同上、p. 336。
- 21) 『広辞苑』第五版、岩波書店、2004年。
- 22) 前掲『隠者の幻』p. 1参照。
- 23) 同上、pp. 2-3参照。

- 24) 同上, pp. 5-186参照.
- 25) 前掲『幻の講話 第五卷』p. 252.
- 26) 同上, p. 254参照.
- 27) 前掲『幻の講話 第一卷』pp. 12-14参照.
- 28) 同上 p. 5.
- 29) 前掲『幻の講話 第五卷』pp. 252-255参照.
- 30) 前掲『幻の講話 第一卷』pp. 6-7参照.
- 31) 前掲『幻の講話 第二卷』pp. 4-5参照.
- 32) 前掲『幻の講話 第三卷』p. 229. pp. 4-5参照.
- 33) 前掲『幻の講話 第四卷』pp. 4-5参照.
- 34) 前掲『幻の講話 第五卷』pp. 4-5, 244-251参照.
- 35) 前掲『幻の講話 第一卷』第2講 p. 16参照.
- 36) 同上, 第3講—第10講, pp. 23-76参照.
- 37) 同上, 第11講—第30講, pp. 84-223参照.
- 38) 前掲『幻の講話 第二卷』第1講—第15講 pp. 6-123参照.
- 39) 同上, 第16講—第30講, pp. 123-242参照.
- 40) 前掲『幻の講話 第三卷』第2講—第30講 pp. 14-259参照.
- 41) 『幻の講話 第四卷』第2講—第15講 pp. 16-144参照.
- 42) 同上, 第16講—第22講 pp. 154-216参照.
- 43) 同上, 第24講—第30講 pp. 233-282参照.
- 44) 前掲『幻の講話 第五卷』第2講—第15講 pp. 14-121参照.
- 45) 同上, 第16講—第30講 pp. 129-245参照.